

# 学会ニュース

## 目次

・ 第33回大会について	.....	1
・ グラーツ大会情報	.....	2
・ 2011年グラーツ大会での日韓共同セッションについて	長尾伸一 .....	3
・ 国際18世紀学会執行委員会報告	王寺賢太 .....	3
【エッセー】		
・ 二人の先達ヴォルテリアン	植田祐次 .....	5
・ スターンの末裔	棚澤雅子 .....	7
・ 現代芸術と18世紀の美学	田中 均 .....	9
・ 事務局より	.....	11

## 第33回大会について

来年度の第33回大会は、2011年6月18日（土）、19日（日）に立教大学で開かれる予定です。開催校責任者は坂倉裕治会員です。詳細は、大会プログラムでお知らせいたします。（4月頃にお届けする予定です。）

共通論題は「表象、その多義性、変容と展開の諸相」で、コーディネーターは鷺見洋一会員です。19日（日）を充てる予定です。

### 自由論題公募要領

第33回大会で発表を希望される会員は、1000字以内の発表要旨をつけて、3月10日（木）までに学会事務局まで郵便あるいはメールでお申し込みください。郵送の場合は要旨のプリントアウト原稿および電子ファイル（「ワード」形式で作成されたもの）の両方をお送りください。メールの場合は、要旨を添付ファイル（「ワード」形式）またはメール本文にコピーしてお送りください。

発表は1件につき50分、うち報告が40分、質疑応答が10分の予定ですが、申込者が多数の場合は、個々の発表の時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野のバランスなどを勘案して、幹事会で調整ないし選考させていただくこともありますので、この点あらかじめご了承くださいませようお願い申し上げます。また、会場で配布されるコピー資料は原則としてご自分でご用意いただくことになっています。

詳細はプログラムが決定次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

## 国際18世紀学会グラーツ大会情報

11月半ばに届いた、大会本部からの第4回ニュースレターの文面です。

- Conference program
- Titles and descriptions of all 160 (approx) sessions and workshops were published on the congress website on the 1<sup>st</sup> of October (see “Program”).  
Applications for session and workshop presentations are now open and will remain so until the 31<sup>st</sup> of January 2011. (The local congress organisation will devise new subject headings for those presentations which cannot be attached to one of the pre-existing sessions or workshops.)
- Bursaries  
Applications for bursaries opened on the 1<sup>st</sup> of October (see „Grants“). Applications should be sent to the congress office ([18thcc.office@uni-graz.at](mailto:18thcc.office@uni-graz.at)) by the 31<sup>st</sup> of January 2011 at the latest. They will then be forwarded to the bursary committee for assessment and the congress office will inform applicants of the committee’s decision at the beginning of March 2011.
- Discount flight bookings  
The Graz travel agents Optimundus will not only search out the best and cheapest flights, they are also offering a 50% fee reduction for conference members.  
Please contact their office as soon as possible at: [m.haselwander@optimundus.at](mailto:m.haselwander@optimundus.at) or [m.gissing@optimundus.at](mailto:m.gissing@optimundus.at).
- Next newsletter  
The next newsletter will be published at the beginning of February 2011. In the meantime, please do not hesitate to contact us if you have any questions: [18thcc.office@uni-graz.at](mailto:18thcc.office@uni-graz.at).
- Programme scientifique  
Depuis le 1<sup>er</sup> octobre 2010, les titres et descriptifs des sections et ateliers enregistrés, au nombre d’environ 160, sont publiés sur le site web du congrès (voir « Programme »).  
Vous avez dès maintenant et jusqu’au 31 janvier 2011 la possibilité d’inscrire votre contribution et de la rattacher à l’une des sections ou ateliers. Les contributions qui ne trouveraient place dans aucune des sections ou ateliers proposés, seront intégrées par les organisateurs du congrès dans de nouvelles unités thématiques.
- Bourses  
Les candidatures pour les bourses sont ouvertes depuis le 1<sup>er</sup> octobre 2010. Elles doivent parvenir jusqu’au 31 janvier 2011 au secrétariat du congrès ([18thcc.office@uni-graz.at](mailto:18thcc.office@uni-graz.at)). Elles seront transmises au comité des bourses, qui fera parvenir aux candidat(e)s une réponse début mars 2011, leur indiquant s’ils peuvent compter sur un soutien financier.
- Offres de voyage  
L’agence de voyage Optimundus à Graz est à votre disposition pour planifier votre voyage en avion à Graz et chercher les offres les plus avantageuses ; vous bénéficiez d’une réduction de moitié des frais de traitement du dossier.  
Le cas échéant, veuillez vous adresser dès que possible à l’agence:  
[m.haselwander@optimundus.at](mailto:m.haselwander@optimundus.at) ou [m.gissing@optimundus.at](mailto:m.gissing@optimundus.at).

- Annonce préalable

La prochaine lettre d'information sera publiée sur le site-web début février 2011. En cas de questions, n'hésitez pas à vous adresser au secrétariat du congrès ([18thcc.office@uni-graz.at](mailto:18thcc.office@uni-graz.at)).



## 国際18世紀学会グラーツ大会での日韓共同セッションについて

長尾伸一（名古屋大学）

現在幹事会と日韓交流担当は、「日韓18世紀学会がグラーツ大会で共催するセッション”Public knowledge in the East and the West: a comparative perspective”に向けて、準備を進めている。2010年11月6日に開催された韓国18世紀学会大会には、増田代表幹事が招待され、報告を行った。長尾幹事と玉田会員が同行し、Moon会長をはじめとする韓国学会役員、会員と、二日間にわたって打ち合わせ会を持った。その結果、日韓共同セッションでの報告者を内定し、韓国学会が独自に企画するセッション”In and out of time: East and West”での日本側報告者を推薦することが決まった。

これに基づいて2012年2月中旬には、高橋会員が研究代表者である科研プロジェクトの一環として、二つのセッションの日韓の報告者を集め、国際ワークショップを開催して、より内容のあるセッションとすることを目指す予定である。



## 国際18世紀学会執行委員会報告

(2010年8月26日、デンマーク、コーリン)

王寺賢太(京都大学)

①会議は国際18世紀学会会長のキース・ベイカーと、デンマーク・コーリンでの幹事会・シンポジウム開催主催者アンヌ-マリー・メイの挨拶で始まった。出席32名、欠席6名。

②前回のグラーツでの会議の報告。若干の細部の修正を加えた上、全員一致で採択された。

ベイカー会長からの基調方針の説明：現在、国際18世紀学会はとりわけその可視性を高め、会員の帰属意識の強化を目指している。またグラーツ大会を前にして、とりわけ学会役員選挙への投票率を上げることが望まれる。

③アンドリエス書記長からの報告：2009年よりウェブサイトと電子名簿をカナダのラヴァル大学と契約して公開する一方、ヴォルテール財団は行政・財務のみを担当する体制に移っている。また、2009年9月リス

ボン／シントラと2010年8月ベルファストで、若手セミナーが開催された。各国の学会をつうじて、学会員に対して国際18世紀学会 ([admin@isecs.org](mailto:admin@isecs.org)) に個人のメールアドレスを知らせることが強く要望された。

電子名簿の管理責任者であるパスカル・バスティアンからは、学会員は国際18世紀学会のウェブサイト上で個人情報の管理ができること、個人のメールアドレスは非公開のオプションをとりうることが報告された。次回の学会役員選挙の際、電子投票するためには、2010年12月31日までにメールアドレスの登録が必要とのこと。

④リン・ロバーツ技術担当書記からの報告：欠席の会計担当書記にかわり、ロバーツ書記から会計報告があった。2009年の国際学会の収入は10961ポンド、支出は12632ポンド、赤字1624ポンド。ただし、ウェブサイト移転費用など特別支出を含む。

⑤アンドリュー・カーペンターコミュニケーション担当書記の報告：ウェブサイトの移転が報告され、各国学会・学会員にコンテンツの提供が呼びかけられた（学会、シンポジウム、出発物の告知など）。

⑥ハラルド・ヘプナーからグラーツ大会の準備状況の報告：同伴者の登録料は90ユーロに引き下げ。なお、使用可能な学生寮は169室のみ。グラーツへの航空便はルフトハンザで割引の便宜提供を受けた。詳細はウェブサイトと連絡とのこと。

—奨学金のため国際学会から20,000ポンドを支出することが提起され、四名からなる奨学金の選考委員が任命された。

—ヘプナー氏からは大会のプログラムについて、現時点までの確定事項の報告があった。とくに、既に登録されているセッションとは別に個人発表を受け入れること、その個人発表をもとに新たなセッションを組むことが確認された。

—グラーツ大会に係わる連絡について、国際学会から学会員に直接メールで案内を送付することができるか否かが検討され、この件について各国の法律専門家に問い合わせる必要があることが確認された。

⑦学会役員選挙：次回の学会役員選挙は従来通りの郵便による投票と、電子投票の二つの選択肢がある。2010年12月31日までの学会費納入が条件。電子メールでの投票に必要なパスワードは、個人メールアドレスを登録済みで個人メールの受け取りを許可した学会員に対しては、国際学会から直接送付される。投票は2011年5月1日から2011年6月末日の予定。学会役員選挙候補者リストは以下のとおり。

*Président* : Marc-André Bernier (Canada)

*Premier Vice-Président (1)* : *un poste* Jean-Claude Bonnet (France), Joan Landes (Etats-Unis), Hans-Jürgen Lüsebrink (Allemagne)

*Second Vice-Président: deux postes*: Lise Andries (France), Penelope J. Corfield (Royaume-Uni), Peter Reill (Etats-Unis)

*Secrétaire Générale: un poste*: Anne-Marie Mai (Danemark), Catriona Seth (France)

*Secrétaire Général adjoint: un poste*; Dimitris Apostolopoulos (Grèce), Rosamaria Loretelli (Italie), Laurenz Lütteken (Allemagne)

*Trésorier: un poste*: Eva Velasco-Moreno (Espagne), Byron Wells (Etats-Unis)

*Trésorier-adjoint: un poste*: Dena Goodman (Etats-Unis), Wiep van Bunge (Hollande/Belgique)

*Membres élus: 8 postes*: Laura Brown (Etats-Unis), Gavin Budge (Royaume-Uni), Pascal Bastien (Canada), Michel Delon (France), Lorenzo Bianchi (Italie), Anna Cullhed (Suède), Anton Demin (Russie), John Dunkley (Royaume-Uni), Pasi Ihalainen (Finlande), Heather McPherson (Etats-Unis), Tanehisa Otabe (Japon), Wolfgang Schmale (Autriche), Geraldine Sheridan (Irlande), Stefanie Stockhorst (Allemagne), Danièle Tosato-Rigo (Suisse), Raia Zaimova (Bulgarie)

⑧若手セミナー：2009年リスボンとシントラの若手セミナー「啓蒙の世紀のヨーロッパと植民地世界」と、2010年ベルファストの若手セミナー「多文化交渉の担い手」について報告がなされた。また若手セミナーの参加者には特に年齢制限を設けないことが確認され、英語名称を「Early Career Scholars」とすることが決議された。フランス語名は「Jeunes dix-huitiémistes」のまま。

次回のグラーツでの若手セミナーについて、日程を大会の前に設定し、若手セミナーの独立性を保つことが確認された。組織担当はアルベルト・ポスティリオラとハラルド・ヘプナー。テーマは「十八世紀における時間と未来の予見」とする。15名の参加を予定。

2012年の若手セミナーは、カトリオナ・セートとギヨーム・アンサールを組織責任者として、ブルーミンガム（インディアナ大学）で「啓蒙とさまざまな自由」をテーマに行なうことが提起され、了承された。

⑨予算および諸報告の採択：グラーツ大会の奨学金として20,000ポンドを提供する予算案と、職長、技術書記、会計の諸報告が採択された。

⑩2006年カナダでの若手セミナーの報告集*Lumières et Histoire*の出版が報告された。来年にはモンペリエでの若手セミナーの報告集が出版予定。国際18世紀学会のウェブ上で刊行を予定している電子ジャーナルIRECSをコーリンでのシンポジウムの報告の発表媒体として検討していることが報告された。ベイカー会長からは、各国の学会誌の論文の要旨をIRECSで公開してはどうかとの意見が出された。

⑪その他：2019年の大会はブリテン、特にスコットランドで開催を検討している。2015年のロッテルダム大会の提案は次回グラーツ大会総会で採択の予定。2012年の幹事会については、モンリオールでの開催が提案された。

以上

☆ ☆ ☆

## エッセー

### 二人の先達ヴォルテールアン

植田祐次(青山学院大学名誉教授)

この夏、ヴォルテールの歴史物の第一作『カルル十二世伝』を調べているうちに、この本の日本語訳があったことを思い出し、本棚を探して久しぶりに手に取ってみた。『英雄交響曲、チャールズ十二世』と題されたその本の冒頭には、恩師辰野隆に捧げられた長文の序文「白鳥の歌（近世欧羅巴最後の日）」が付けられている。

この日本語訳の出版は昭和十七年だが、「序文」は昭和十六年十二月十六日の日付であるから、いわゆる大東亜戦争勃発の一週間後、「感動に胸を突き動かされて」一気に書かれたようだ。日独伊同盟成立の報に胸を躍らせながら、十二月八日を「世界的瞬間」、「奇跡」とまで形容している。

訳者は六年間のフランス留学を終えて帰国したばかりであったらしい。「序文」では、留学中に「近世ヨーロッパの最後の日」、「断末魔の第三共和国フランス」、要するに西欧の没落を見届けて来た者として、ヴォルテールの『カルル十二世伝』の翻訳を思い立ったと語られている。

「序文」を辿ると、ヴォルテールはアジアの伝統に憧れ、日本の武士道に目を見張り、ヨーロッパの限界をはっきり意識していたのだという。実を言えば、ヴォルテールがインドや中国や日本の習俗に興味を示し、文献を渉猟していたのは、キリスト教にもとづく西欧文明を世界の中心に据える独断的な見方を相対化するために外ならなかった。しかし訳者は、カルル十二世とロシアのピョートル大帝の対立にヒトラーとスターリンの対立を重ね、文学は本来、戦争文学であると言い切っている。

カルル十二世は十七世紀末から十八世紀にかけて二十年ほど在位していたスウェーデン国王で、王位を継いだときはわずか十五歳の若さだった。弱年の王とみくびったロシア、デンマーク、ポーランドはヨーロッパ本土側のスウェーデン領の分割を策した。それを知ったカルル十二世は、敢然と強国の同盟軍に立ち向かう。まずデンマークに侵入して和睦を受け入れさせ、ピョートル大帝のロシアに

進軍して大勝し、ポーランドを攻めて和睦させるなど、目覚ましい勝利を得る。しかし、その後ふたびロシアに進軍して大敗を喫し、トルコに逃れるが、攻囲戦で謎めいた戦死を遂げている。

カルル十二世は勇敢さ、若さ、軍人としての卓越した指導力、三十六年の短い生涯といったようなことから、伝説的な悲劇の英雄として称えられた。ヴォルテールの『カルル十二世伝』は伝記というより、後の『習俗試論』など一連の歴史物の第一作と考えられている。二十年に及ぶ戦争の歴史を含むため、作中では破壊や戦闘のシーンが随所に描かれているが、ヴォルテールは二つの挿話で戦争の嫌悪すべき本質を描いているように見える。

一つ目の挿話では、カルル十二世がポーランド王アウグスト二世の和睦の申し入れを受け入れるに際して、敵軍の愛国者の引き渡しを条件とする。その結果、愛国者は死刑を宣告され、世にも無残な車刑を執行される。囚人は腰と手足の骨を砕かれた上、車に縛りつけられたままさらし者にされ、切り刻まれた挙げ句、慈悲と称して殺されるのである。

もう一つの挿話では、或るスウェーデンの将軍が敵への報復措置として、エルベ川に面したアルトナの町を焼き払うと決める。その方針は真冬の一月に決行され、住民たちは北風が吹きすさぶ中を氷に覆われた周辺の丘へと追い立てられる。産後間もない若妻たちは乳飲み子を抱えたまま、自分たちの村を燃やし尽くす炎を遠くに眺めながら、丘の上で子供と共にこごえ死んで行く。翌日、生き残ったアルトナの住民が這うようにしてようやくハンブルクの町の城門にたどり着くと、ハンブルクの住民は城門を固く閉ざして彼らを町に入れようとしなかった。そのため、アルトナの住民は飢えて凍死する。

最初の挿話はいわば職業軍人としての若き国王による残虐行為を描き、二つ目の挿話は非情化した一般住民、つまり平時には人情をわきまへ人間性をそなえているはずだが、戦時下には戦場の指揮官にも劣らない残忍な行為を平然とやってのける一般住民を描いている。二つの挿話には、戦争が人間性そのものを変質させるというメッセージが込められているようだ。

ヴォルテールは『カンディード』、『哲学書簡』、『哲学辞典』、『書簡集』などで戦争の愚劣さと残酷さの実例を繰り返し描いている。彼にとって正義の戦争は存在しなかった。してみると、邦訳『英雄交響曲』はフランスの古典が曲解されて戦争賛美の口実となった痛恨の書と言わなければならない。

＊

高橋安光さんがいつの頃から『ヴォルテール書簡集』の訳業に取り組まれたのか、私は知らない。しかし、確か二〇〇五年の春に頂戴したお葉書には、入退院を繰り返す闘病生活がつづられていた。この最後のお仕事が病床で持続された苦闘の果実であることは間違いない。

何しろ、優に一万五千通を超す手紙を訳出することは不可能といってよい。そうだとすれば、書かれた時期や相手や内容によって一定数を選ぶことから始めなければならない。気の遠くなるような仕事が闘病生活の中でつづけられたことを思うと、先達の鬼気迫る執念が伝わって来る。全体の一割弱とはいえ、A5判総ページ1,360ページの『ヴォルテール書簡集』は、啓蒙の世紀の生々しい現実と生活と人間関係を活写しているばかりでなく、作中で自己について赤裸に語ることを好まなかったヴォルテールの内面をうかがう上でもこの上なく貴重である。

二〇〇八年二月末から二か月ほど、私はフランスに滞在した。そして五月に、喫茶店の一隅で、法政大学出版局の編集長だった平川俊彦さんから、高橋安光さんが三月に亡くなられたことを聞き知った。平川さんからは、それまで何度か私と会うたびに『書簡集』の進捗状況や高橋さんの病状をそれとなく伝えてもらっていた。校正の段階に入ると、最後の気力を振り絞って仕事がつづけられたにちがいない。

ついに三月に入って待望の見本刷が仕上がると、平川さんは即座に本をリュックに詰め込み、その

足で病院へまっしぐらに急行した。病室に駆けつけた平川さんは、昏睡状態でベッドに臥せる高橋さんの胸元に大部な本を押しつけ、「先生、ほら、出来ましたよ」と耳元で叫んだ。そのとき、病床の高橋さんがかすかにうなずかれたように平川さんには思えた。高橋さんが息を引き取られたのは、その翌日の早朝だったという。

平川さんの話は、死の四日前のヴォルテールの反応と一瞬、私の中で重なった。昏睡状態に陥っていたヴォルテールは、冤罪でラリー將軍を処刑させた高等法院の判決が國務諮問会議で破棄された、という朗報を聞いて突然、意識を取り戻す。そして、息子のラリー騎士に短い祝意の手紙を口述すると、ふたたび昏睡状態に戻ったという。ヴォルテールのこの最後の手紙が高橋安光さん個人訳の浩瀚な『書簡集』に収められていることは言うまでもない。

## スターンの末裔

榎澤雅子

漠然と夢見ていた2007年大会のモンペリエに足を踏み入れることはできなかったが、『学会ニュース』（第56号、2008年1月）には、参加した会員のかたがたによるいくつかの異なる領域からの報告があって、大会の様態を垣間見ることができる。個人的な関心事に引き寄せていうと、「感傷旅行気味の報告」という遠慮がちな副題のついた鷺見洋一氏の一文は、日本の研究者の活動からダントン教授の名講演にいたるまで、学会のある種高揚した空気を伝えるものがあって興味深かった。『猫の大虐殺』の著者は、たしか会長職にあった1991年のブリストル大会でブリストル大学から名誉学位を授与されたが、特別講演を含む授与式もまた超満員であったこと、ジョークをまじえながらの颯爽とした話しぶりであったことを思い出す。

そういういわば公けの部分に加えて、モンペリエの町と大学が執筆者の今日に至る充実した研究活動の重要な部分を築いた場所であるらしいことがうかがわれて、実に羨ましかった。鷺見氏ならずとも、凝縮された時間が刻印された特別な空間をお持ちの会員は少なからずおられることだろう。それが外国である必要はない。私自身に決定的に欠けているもののひとつなので、今更ながら羨ましいのである。

さて鷺見氏の副題に便乗して、ロレンス・スターンをめぐる我田引水的な話題を二つ。

今では日常的な日本語にもはいつている「センチメンタルジャーニー」の元祖『感傷紀行』（あるいは『風流紀行』）（*A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick, 1768*）の作者は夙にディドロとは親交があり、ドルバックのサロンにも出入りしていた。問題は、この旅行記が作者の意思とかかわりなく（というのも刊行後まもなく病死しているからだが）、同時代のヨーロッパで引き起こすことになるちょっとした言語的騒動である。

英語の形容詞sentimental（*OED* 初出 1794）は、本来、「洗練された崇高な感情」につながる意味合いをもって登場した新しい語であったが、1760年代から70年代にかけて、「繊細な感受性」とより深く結びつき、さらにはのちの「センチメンタル」的意味合いへの傾斜を強める。スターンの旅行記出版はこの傾向を決定づけるものであった。ただし、スターンがこの語をつねに同じ意味で使っているわけではないのでややこしい。原著出版からまもなくドイツに生まれた関心と翻訳について、むかし、詳しく教えてくださったのは南大路振一氏である。つまり、レッシング経由で翻訳を手がけることになったボーデは、この作品のためにあらたにempfindsamなる語を案出しなければならなかったの

だと(Johann Joachim Bode, *Yoricks Empfindsame Reise*, 1768)。似たような事情は翌年刊行されたフランス語訳にも存在する。手元の*Le Petit Robert*にも記述があるが、sentimentalの初出はスターンの初代翻訳者フレネのものである。(Joseph Pierre Frénais, *Voyage sentimental*, 1769)。

旅行記を離れてもう一つスターンがらみの話題は、もっぱら主著である小説*Tristram Shandy*(1760-67)にかかわるもので、20世紀も半ばの1960年代、この18世紀作家に取り憑かれたような関心を抱き続けながら、結局は自殺して果てたイギリスのある孤独な「前衛」をめぐる後日談である。

1970年代のある時期、私はB. S. Johnson (1933-1973)という夭折の作家が遺した数編の長編小説を探しまわっていた。生前出版された作品のほとんどは売れずに終わってしまっただけで、日本では小説第3作『トロール』が、原著(1966)刊行後比較的早い時期の1969年に筑摩書房から柳瀬尚紀訳で紹介されていた。ロブ＝グリエやナタリー・サロートの翻訳が出ていた時代である。ロンドンの古本屋を中心に、やたら高値のついたものをふくめて10点ほどの著作をとにかく手にし、作家の姿に接することができるまでには少しばかり時間を要することになった。

「ジョイスがすべてをやってしまったあともう何もできなくなってしまった」という意識にとらわれつつ、ジョンソンは200年前の「前衛」に向かう。「物語をいかに語るか」というシャンディ的課題にどっぷりと浸かりながら、シャンディ的パステーションというべきピカレスクを皮切りに、一作ごとに異なる形式をかなり苦しげに試み、コミック・モードの小説を追求し続けたのである。もちろん、自殺が作家の抱える文学的課題と直結するかどうかははかりようがないけれども、私の頭の中でこの作家には常に痛ましさがついてまわる。

たとえば、私のもっぱら日本語の翻訳を通してお世話になる20世紀のラテン・アメリカ系作家たちが繰広げる壮大な物語の世界は、奇想とか饒舌とか混沌とかを含みながら、それでも、「豊饒」という語につながるものを与えてくれる。あるいはバース、ピンチョンなど一群のアメリカの作家や、ヨーロッパその他の多言語的文化圏を背景に生み出される作品の世界についてもいえそうだが、ジョンソンは、あまりに「純粹種」であり過ぎたように思えるのだ。

しばらく視界から遠ざかっていた作家だが、世紀が変わるころ、この方面の事情に詳しい友人が、「B. S. Johnsonが復刊されるそうですよ」と教えてくれた。ようやく陽の目をみるようになったのかな、とほっとするような気持ちであった。そして2004年の夏、ぼんやり眺めていた*TLS*紙上で、B. S. Johnsonの長編3点をまとめた新装版に加えて、かなり大部の新刊の伝記が取り上げられているのには驚いた。伝記の著者はJonathan Coeという1961年バーミンガム生まれの小説家。生前のジョンソンがそうであったように、この人も小説を書く一方、現代風にテレビや映画の仕事にもかかわっているらしい。ついだ同年秋、ヨークのスターン協会が発行する年刊の研究誌*The Shandean* (Vol. 15, November 2004)には、コウ氏はその年の初夏に、招かれて北ヨークシャーの小さな村にあるスターンの旧居(通称シャンディ・ホール、毎年スターンに縁のある研究者や作家を招いている)で行った講演が掲載されていたのである。それはスターン、B. S. Johnson、ジョナサン・コウの浅からぬ因縁を示すものであった。

ごく最近偶然得た遅ればせの情報によると、コウはこの伝記(*Like a Fiery Elephant: The Story of B. S. Johnson*, 2004)によって、2005年BBCの「サミュエル・ジョンソン・ノンフィクション賞」なるものを受賞していたらしい。こういう賞が存在することも知らなかったし、ついに18世紀イギリス文壇の大御所登場といえば飛躍も甚だしいが、こころの隅でいくぶん救われる思いがあった。たとえこれが「不遇の作家復権」とまでは行かないにしても。

モンペリエからずいぶん遠くまで来てしまった。すでに次の大会も近く、開催地グラーツについては寺田元一氏の探訪記が『学会ニュース』(第62号、2009年12月)に掲載されている。かつてシュト



ウルム・グラーツを率いて栄光に導いたオシムさんが、先のワールドカップ南ア大会の期間中ほぼ連日、この町から東京に向けて発信する充実した辛口の論評を楽しんでいたせいも、グラーツという地名は私の頭の中に確実に刷り込まれてしまったらしい。

## 現代芸術と18世紀の美学

田中 均（山口大学）

今回、18世紀学会の学会ニュースにエッセーを執筆する機会を頂いて、正直なところまず思ったのは「自分にそのような資格があるだろうか」ということであった。というのも自分のこれまでの研究を振り返ってみると、18世紀からしだいに遠ざかっているように思われるからである。私の研究の出発点はシラーの美学にあったが、その後ドイツ・ロマン主義、とりわけフリードリヒ・シュレーゲルに移り、18世紀美学の研究というよりは19世紀に片足を突っ込んだようになった。幸いにしてこのシュレーゲル研究にも一つの区切りがつき、現在の私は新たな研究テーマを模索しているところなのだが、ひょっとするとドイツ・ロマン主義よりさらに後の時代の美学を研究するかもしれないと予感している。こうして自分が18世紀研究からしだいに縁遠くなっていると感じているのが実情なのである。

このように私が最近18世紀研究から遠ざかりつつあるということは、研究環境の変化ともある程度関係している。主に東京で大学院生や研究員をしていたころは師や学友にも恵まれてドイツ近代美学の研究に専念していたのだが、縁あって山口大学に赴任してからは、まず山口という土地を知るために、「この地域では芸術はどのような展開をしているのか」という関心を持って文化施設などに通うようになった。そこで分かったのは、山口市は小都市でありながら現代芸術、特にメディア・アートの先進地であり、舞台芸術についても非常に実験的な作品を発信しているということである。

こうした事情から私は、（いささか無謀なことにも）現代芸術の傾向を美学的に捉えることができないうものかという関心を抱くようになった。そこで遅まきながら理解したことは、これまで学んできた近代美学の知識によって、現代の多様に展開している芸術現象を捉えることの困難さだったのである。それ以来私は、現代芸術を理解するうえで18世紀の美学、さらに広く捉えて18世紀に成立した西洋近代美学はそもそも有効であるのかと自問するようになった。

その際に私がとりわけ念頭に置いているのは、1990年代以降の芸術が、芸術家ではない人々の作品への「参加」や芸術家との「対話」を重要視しているという現象である。こうした現象は大きく二つの流れに区別できるだろう。一つは、パリの現代美術館パレ・ド・トーキョーのキュレーターであったニコラ・ブリオーが『関係性の美学』（1998年）において「関係性の芸術」と総称した事例である。ブリオーが好んで挙げる例では、リクリット・ティラヴァーニャはギャラリーや美術館の中でカレーを調理して観客に振る舞い、そこが人々の出会いの場所となる。またフェリックス・ゴンザレス＝トレスは大量のキャンディーの山を展示し、観客が自由に持ち帰れるようにするが、ブリオーによればこれは観客が作品との相互作用、作品に対する責任を意識するようにさせるものである。

もう一つは、「コミュニティに基づく芸術」あるいは「新しいジャンルのパブリック・アート」、「対話型芸術」などと呼ばれるものであり、地域住民のコミュニティと芸術家が対話を重ねることによって、そのコミュニティが必要とするプロジェクトを実現するというものである。こうした芸術に

ついでに代表的な論考の一つ『カンヴァセーション・ピーシイズ』（2005年）で著者グラント・H・ケスターが挙げている代表的な事例には、芸術家グループ「ヴォッヘンクラウズーア」がチューリッヒでドラッグ中毒の女性を援助するための対話プロジェクトを实践した例（1994/95年）や、スザンヌ・レイシーがカリフォルニア州オークランドでラテン系・アフリカ系の少年を巡る諸問題について対話の場を設けた例がある。

以上のような、大きくまとめて言えば90年代以降の「参加型芸術」と呼べる現象は、日本でも次第になじみ深いものになりつつある。日本で開催される国際展覧会、アートプロジェクトなどにおいても、カフェやレストランを開くこと自体が芸術作品とみなされる事例や、観客が日常生活では接触しない異質なコミュニティと対話することが作品として制作される事例が見られる。また各地の美術館ではしばしば、地域住民が参加し芸術家と協働するワークショップが企画されている。

こうした現象は、芸術家が自分の独創性を作品という形で表現し観客に伝達するという一方向的な関係への反省を背景としており、また、芸術と生活を融合させるという理念自体は最近のものではなく、少なくとも20世紀初頭のアヴァンギャルドまで遡れる。その一方、美術史家・批評家のクレア・ビショップは、近年のこうした「参加型芸術」の問題点として、コミュニケーションが成立すること、対等な対話が成立すること自体に価値が置かれる傾向があり、芸術が美的な基準ではなく道徳的基準で評価されているのではないかと指摘している。

こうした「参加型芸術」をめぐる議論において私が特に注目しているには、哲学者ジャック・ランシエールの論考「政治的芸術の逆説」（『解放された観客』（2008年）に収録、以下独訳（2009年）からの頁数を挙げる）である。というのも、彼は18世紀における近代美学の成立との関係において、最近の芸術の「再政治化」（64）を批判的に評価しているからである。ランシエールによれば、人々の出会いや関係の形式それ自体を制作することで従来の芸術と社会との分離を克服したと称する「関係性の美学」は、実は芸術と非芸術との差異に依存している。なぜなら、ティラヴェーニャのキッチン、美術館やギャラリーのように芸術のために用意された空間に置かれて初めて注目を浴びるのであり、またルーシー・オルタがパリで制作する避難テント兼用衣服は、たしかに美術館の外の公共空間で使用されるが、それはスペクタクル的に人々のつながりを展示することによって、美術館から飛び出した芸術として評価されるからである（85f.）。「コミュニティに基づく芸術」の場合も事情は同様であり、例えばルネ・フランシスコが2004年のサンパウロ・ビエンナーレにおいて恵まれない地区の高齢の女性のために家を建てたプロジェクトは、その記録が美術館に展示されることで規範性を認められたのである（86f.）。

芸術のなかに社会関係を直接持ち込むことも、また芸術家が社会に直接介入することも、どちらも芸術と非芸術の区別に依存してしまう、この「政治的芸術の逆説」に対してランシエールは、政治と芸術との関係を定式化し直すことによって答える。彼によれば政治とは第一義的には権力の行使や権力闘争ではなく、誰が共同体を構成する主体であり、何が法や制度の対象となるのかを決定する、その枠組み自体を定める行為である。すなわち政治とは、「自然的」なものとして存在している区別、すなわち支配者と従属者、有能なものと無能なもの、公的なものと私的なもの、見えるものと見えないもの、言葉と騒音との区別を中断させる「不同意」の実践である（73）。そしてランシエールは美的経験もこの「不同意」に関わると述べる。なぜならば、美的経験において芸術は目的と手段の連関から解放されて機能を失い、中立化された空間・時間のうちに置かれるからである（74）。ランシエールはこうした美的経験における「不同意」の例として、『不同意—政治と哲学』（1995年）では、カントが『判断力批判』第二節において、宮殿は美的判断にとって「住みやすさにも役職の特権や王家の紋章にも無関係な評価の対象」となると述べていることを挙げる（松葉祥一訳『不和—あるいは了解なき了解』104頁）。

ランシエールによれば、既に述べた「参加型芸術」の問題は、虚構としての芸術の外に確固とした「現実の世界」が存在すると前提しているところにある。実際のところ芸術も政治も、何が見えるもの、語りうるもの、成しうるものであるかを構成し、およびそれらの行為の主体を規定することであって、そのような意味での「虚構」は芸術と政治の両方に必然的に属す(91)。そのような意味で、政治はあらかじめ美学的(感性論的)であり、芸術はあらかじめ政治的であると言えるし、その場合の芸術とは、能動的な「参加」の対象ではなく、一見すると受動的に思われる観照の対象なのである。

そして重要なのは、機能の中断、中立化の場として芸術を見るという枠組み、すなわち「芸術の美学的体制」は18世紀に成立したとランシエールが述べていることである。芸術、とりわけ演劇が観客に道徳的観念を伝達し教育するという伝統的な思想(これは「芸術の表象的体制」と呼ばれる)に疑問を呈したルソーから、ヴィンケルマン、カント、シラーに至る美学理論によって、作者の思想や描写される主題と鑑賞者との間の疎隔が確立し、「芸術の美学的体制」が成立したのである。これに関して挙げられる印象的な例は、シラーの『人間の美的教育についての書簡』(1795年)における「ルドヴィシのユーノー」の描写である。というのも、かつて神の表象として機能したこの像に見て取られるのは、「ラディカルな無関心性」、つまり「能動性と受動性の区別自体を廃棄するような、配慮、意志、目的のラディカルな不在」に他ならないからである(71)。

以上のランシエールの議論は、やや美学に肩入れしすぎのようにも見えるのだが、一見すると現代芸術によって乗り越えられたかに見える近代美学が、芸術における「参加」あるいは「政治化」の問題を批判的に捉え返す際に重要な意味を持っていることを教えてくれる。そのため、明示的な研究テーマは18世紀研究から離れたとしても、これからも18世紀の美学を不断に参照するだろうと最近の私は考えているのである。



## 事務局より

### 日本18世紀学会役員選挙について

当学会では、2年ごとに役員選挙が行われており、2011年はその年に当たります。同封の投票用紙、封筒を使って投票してください。要領は別紙をご参照ください。投票締め切りは2011年3月9日です。なお、役員選挙用の封筒にほかの書類(業績リスト等)を入れないでください。

### 業績アンケートについて

『年報』に会員の業績アンケートを掲載するために、例年この時期にアンケートを行っています。同封の用紙の要領に従って、回答をお願いします。締め切りは2月末です。データの整理のため、早めにお返事いただければ幸いです。

## 日本18世紀学会会員名簿について

2011年は名簿作成の年度に当たります。同封のカードに間違いや変更がないかどうか、ご確認の上、1月31日（月）までに事務局に連絡をお願いします。なお間違いや変更がない場合も、その旨を事務局にご連絡ください。また、生年月日は役員選挙の被選挙権者名簿作成のために必要ですのでご記入ください。（名簿では公表されません。）

事務局の連絡先は以下の通りです。

- E-mail : jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp
- 郵便： 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部 増田（仏文）研究室
- Fax : 075-753-2766

## 2011年グラーツ大会情報

前掲の記事にもありますように、国際18世紀学会の第13回大会は2011年7月25日（月）から7月29日（土）まで、オーストリアのグラーツで開催されます。

大会関連のサイトがすでに開設されています（[www.18thCenturyCongress-Graz2011.at](http://www.18thCenturyCongress-Graz2011.at)）のでご覧ください。

日本からも多くの会員が参加されることを期待します。

## 国際18世紀学会「若手研究者セミナー」についてのお知らせ

すでにメーリングリストを通じて配信しましたように、上記セミナーの応募期間が延長されました。その通知メールの文面をあらためてここに転載します。

Dear colleagues/Chers collègues,

The organizing committee of the Congress in Graz has decided to accept applications for the early career scholars seminar till the 31st of March, instead of the 31st of January. /Le comité organisateur du Congrès de Graz a décidé d'accepter les dossiers de candidature pour le séminaire des Jeunes Dix-Huitiémistes jusqu'au 31 mars au lieu du 31 janvier 2011.

Thank you for circulating the information/ Merci de faire circuler cette information.

Bien cordialement,

Lise Andries

ISECS Secretary general

## 国際18世紀学会の名簿について

前号ですすでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴァル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org>）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、その旨連絡してください。

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

国際学会へのメールアドレスの連絡は、来年に予定されている国際学会の執行委員の選挙に際しても特に重要です。来年の選挙は、メールでの投票と、郵便での投票の二通りの投票の仕方があり、グラーツ大会その場での投票はできません。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用して

ください。

以上ホームページ関係の連絡は、Pascal Bastien. admin@isecs.orgまで直接行なってください。

※日本18世紀学会事務局でチェックしたところ、誤ったデータ（すでに退会した会員のデータ、名前の誤表示など）が多数見つかりましたので、わかる範囲内で事務局で訂正いたしました。新入会員の方、連絡先等に変更のあった方はなるべく自分で上記アドレスに申告していただくか、ご自分のデータを更新してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（画面上部のISECS-Directというボタンをクリックすると名簿にアクセスできます。）

### 投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、前回の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限ります。）

### 共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

### 学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、4月号は2月初め頃までに、9月号は7月半ばまでに、12月号は10月初めまでに、ご希望をお寄せください。）

### 年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

### 会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費の払い込み用紙を同封させていただきます。未納分のある方には、その年数に応じた金額を印字した用紙を送らせていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。

### 寄付のお願い

別紙要領をご覧ください。

### 寄付のお礼

「学会ニュース」前号で寄付受付開始をお知らせしましたが、それ以来、以下の方々から寄付がありました。お礼申し上げます。

匿名希望 50口 50,000円

増田真 5口 5,000円 2名 計 55,000円

### 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

### 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

### メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一、井田尚、伊東貴之(東アジア交流担当)、王寺賢太(国際幹事)、小田部胤久、笠原賢介、川島慶子、小穴晶子、関谷一彦(常任幹事、年報担当)、田邊玲子(常任幹事、年報担当)、寺田元一(国際学会執行委員)、長尾伸一(東アジア交流担当)、中山智子(常任幹事、総務・会計)、服部典之(常任幹事、年報担当)、堀田誠三、増田真(代表幹事)、吉田耕太郎(常任幹事、年報担当)

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第65号 2010年12月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田(仏文)研究室

e-mail: jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp

tel. / fax: 075-753-2766

http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/